

が邪魔したり、水蒸氣や雲の關係なごでよく見ぬないのだ、我が岡山では南方の兒島半島の連山あるも餘り高からず、雲も比較的少い時が多いから、十月以來翌年三月迄注意すれば晴れたる夜には屹度見ゆる。カノーブスの南中するのは略々左記の通りであるから、その前後約一時間都合二時間位は見ることが出来るので、迷信とはいひながらこの壽老人星を眺め幸福を受けられると思へば體り悪い氣持もせないのだ。

十月一日午前六時、十月十六日午前五時、十一月一日午前四時、十一月十六日午前三時、十二月一日午前二時、十二月十六日午前一時、一月一日午前〇時、一月十六日午後十一時、二月一日午後十時、二月十六日午後九時、三月一日午後八時、三月十六日午後七時。

ざつと半々年間は毎日見える譯で十一月から十二月迄は午前一月から三月迄は午後に注意して見るに南の地平線近くに燦爛たる一等星は外にはないのであるから十分にその美觀を味はれると同時に天文學上研究すべき點の多きこの星を興味を以て迎へられんことを切望するのである。

(一九三二、一〇、一)

詩人の生活に於ける天文学(二)

A・D・ワットソン
T・E・生 譯 註

凡ての人類の中で詩人は其生活の凡ての行路に『かくて我等は星々に達するなり』との題目を掲げる。彼は凡ての花の中に永遠的の美を洞察し、凡ての星の中に宇宙的法則を觀取するのである。彼にまつては『十二宮がその時にしたがつて』出で来る(譯者註舊約聖書百約記三十八章二十二節)事はかの秩序の表現であつて、それに従ひ、又それに據つて凡ての遊星も、凡ての彗も其の軌道を保つものである。何となれば詩人は其言葉が意味する様に創作者である。概念を再び合して新しい觀念を作る構想力は詩人の創作的能力である。それにより彼は新しい構成と意味とを喚起する。彼等は少數の事物に忠實であつたが爲めに多數の事物を支配せしめられたかの靈魂に従つて實在の公道に進み入る。

萬人は一定の影響の範圍、活動の舞臺、能力の區域を持つ

てゐる我等の中大抵の者は自己の生活の區域を短縮せしめる然し乍ら我等は悠々無感覺にそれをなすのであつて我等の注意を局部的、且つ一時的利害に献けながら吾等は自己の生命を更に大にして更に建設的な方面に無効にする。此遠大ならざる區域は思潮を涸渇せしめ、應々身體を焼き盡す輕卒に又無考慮になされた最高の撰擇は時として一生を浪費させる基礎建築には時間と忍耐を要する。報酬はより益々大である。大きな結果は思考と凝思と固執とを要求する。凡ての科學者の中、恐らく天文學者程忍耐強い者は無からう。彼は諸星の廣大な區域を眺め、かれらの範圍の廣大な運動の精確なことを喜ぶ。

天文學者は物質的宇宙の一部分として、かれの肉體的些細を感ずる從つて彼は謙遜な人格者である。彼の聲は街に聞くことが出来ない。彼は地球は一遊星に過ぎず、且つその本遊星ですらも他の諸恒星と比較すれば目立って輝いて居ない事を知つてゐる。地球は小さいけれども人間は尙は無限に小さい屋上から人間自身の尊大を叫ぶことも何の効果もない。天文學者は此の事をよく知つてゐる。

眞正の詩人は天文學者の如く自負的ではない。而も一個の靈魂として自から全宇宙の肝要部分である事を感じる。彼は自己の裏に更に大きな生命の諸流が活躍するを知り、又彼が流れるも浮ぶも彼の極性は全體の一部でなければならず、或は彼は天秤上の細微な塵の如く顧みる要なき極少量であることを認識した。彼はそれが鍛練されたのを見た。そしてそれを眞理として受け入れた彼が科學に對して爲した暗示は凡て正確である。而も彼は決して正確の爲めに其の作品の高尚な詩的性質を低下せしめる様な事はしなかつた。彼の天才は兩者を達成するに充分であつた。彼の天文學に於ける趣味は純粹であつた彼は己が所有地上に一つの望遠鏡を持つてゐたそして更に有力な眼鏡の必要な場合には應々隣人のノルマン・ロッキヤーを訪問したが、彼は親しき友誼を保つてゐた。テニスはニュートン、ハーシエル、ラブラス及びダーウ井ンの事業を知る利益を有してゐた。彼は彼の科學概念の基礎を是等の人々の成果の上に置いた彼は美しい畫的描寫を爲すために例へばコルリツヂが次の如く云つた場合になした様には毫毛の差をも事實を曲げる様な事はしなかつた。

其の下の端に一つの輝く星をもつた

あちらの角ある月よ

唯それが眞であるならば、若し星が角ある月の下の端の下方に置かれるれば其の繪は更に美はしくあつたであらう。

ダンテは既に自分の使うために建設された宇宙開闢論を發明して彼の『神曲』の基礎をなした。

ミルトンはコペルニツクス、ガリレオ、コロンバス、マゼラン及びバスコダガマに由つて獲られた成果に就いて承知して居つた。然し彼は自己の史詩の中に更に古代の學說をも結合せしめた。彼はガリレオを訪問して其の『視^{オプティク}管』をのぞいたが、彼は慎重であつた

カナダの王立天文學會々員をして我等は科學を歌をもつて祀りこめた人々の中で海邊に生れた我國のプリス、カルマンが其の『海童の歌』中の屢々天體の事に言ひ及んだ或句に由つて抒情詩人の最大な者に對抗してゐる事を知らなければならぬ次の流星に關する暗示はさ歡喜に富んだものではない

夜の紫色の帳りがこめるや否や

余はバット燃えつゝ、競ひ走る流星を見守る

かの黄昏の華麗なる遊牧人が

空の暗黒を横切りて行けるを

又地球について彼が次の如く云つに時に其諷喻よりも更に歡喜に充ちたものは無い。

世界は透明な緑に金の泡の如く

を知つてゐる。故に彼は生命を大弦に調節する。彼は廻轉する球狀被殻の運動から生じる音樂に自らを調和させる、そして彼の運命は如何なるも高貴ならざるべからざるを心得てゐる。之れは天文學者にも詩人にも共通的に眞理である我等の宇宙の様なかゝる宇宙に於ける安泰の感は眞の偉大の一種であつて、天文學者詩人の衷より外に更に更に靜澄に存する所はないのである。

詩人がなした科學に對する凡ての貢獻の中で最も美麗なものは彼が自然の調和と生命の一致とを認識し且つ啓示する事であつてそれに就いて天文學者は其從來未知の眞理の大陸を詳細に發見するのである。詩人は發見された眞理の極僅かの暗示から最も僅かな事實を採用しながら、凡て是等の趣味の衣と音律と韻との體裁それは眞理に美と力との區別や永續す

る青春の不斷の愛らしさを與へるを以つてその含める意味を
装はせて之等の大陸を描く、現時科學的時代に我等の知る生
命の偉大な聲音漸加に事實を其の個有の順序に置かうと思は
ゞ只細心の注意と忍耐との共勞に由るのみである。

我等の詩人が如何程美はしく其時代に奉仕した事であらう
科學世界に於て我が英人テニスン是如何に偉大な勇將であつ
たらう。彼の觀察力は新思想の眞實を未だ其の新しい時分に
光の中に泳いでをる

是等は凡ての科學中の最高なものゝ或局面を正確に記述する
ものである。余は思ふ、彼が空の描寫の或るものより優れて
美麗なもの絶無である。

かの大いなる新鮮味ある夜が海より現はる
此處に桂冠詩人たるの價值ある詩人が存するのである

他のカナダ人天才ロバート・ノルウツドの筆になる『近代主
義者』に題する一卷の詩中に次の臺詞がバルセーザル・メー
ガスと云ふ獨白から拔萃されたのを發見した。

月は没する。

余は弓形の新月が沙漠の上低く

雲の近くにかゝるを見たり……………

かの柄杓をかへして凡ての黄金を今空の上に
撒きちらせしは誰の手ぞ

小柄杓は徒らに邪魔をする

かの大水はその差し出でし縁を越えて溢れ

夜の待ちこがるゝ金櫃の中にぞ注ぐ

ヴェがよ、汝がかく爲したりしや

尺秤はかしこに

此の黄金を秤らんにて起つ。愛らしき秤の

婦人よ、ヴェガがアークチュラスに結婚すれば

幾タラントの持參金を有するや？

彼女をして今乙女の輝く足下に伏して

自己が婚姻に祝福を祈らしめよ！獅子の

鎌にて穫り取られし東にかの少女が満足せん事を

―黄金は王のもの―アークチュラスは羊を看守る。

ノルウツドは我等の他の……愛せられて失はれたのでなくて
失はれて愛せられた詩人である。そは之れが自然的の順序に
見えるのである。

天文学の靈的、美術的の價値の體現は他のより若いカナダ詩人の作物の中に表はれてゐる。一例はリュイス、ミリガンの作『手招ける空に映る輪廓』中に見出し得る。『靈妙なる占星術』と題する一小詩中に木星と金星との或る合が云ひ及ぼされてゐるが、曰く

美はしき金星を誇りかなる木星と

婚禮の爲めにか紫の光の中に相會する

之れぞ全能と愛との結婚なれかし

古代に於ては詩は當時三つの第一流の職業であつた天文学、醫術及び宗教の殆ど成分的部分であつた。此の三つは單一に於ける三つ一組であつた。何んとなれば一人で僧侶、占星家及び鍊金家或は醫者であつたからである此の人格者殆ど凡ての場合或種の詩人であつた。其著『共和國』中に若し人が此の種詩人を之等えたいもの知れぬ人格者の或者の如くに考へる時に科學者の心に及ぼす詩人の影響を非難したプラトーを何人も咎めない。他方に於てプラトーは普通以上に詩人の心を持つてゐた事を記憶するを要する實際かの筆紙に盡し難き美の外衣、色合と魅力、それを以て詩は科學の重要な事實、

を飾るそしてそれは愈々我等が稍漠然と稗史とか大氣とか名づけるが、各時代の最善の心の所有者から殆ど事實を自身を越えた評價を受けたのである。

詩人の職能は最近の知識を暗示と歡喜の外衣の中に包み、かくして科學と詩歌との婚姻を祝するにある。彼は其の詩句に表はされた祝詞の美なる爲めに科學をして著しく心情に興味あらしめ、爲めに歌に由つて裝はれた眞理が自から人類の意識中に永久に歌う歌であらう様に爲さなければならぬ。

かゝる詩が蒐集された一卷は速かにあらまほしきものである誰か自らには詩的表示の天賦を要せず、唯寧ろいゝ美はしい趣味を以つて科學と詩とを認識する辨別の能力あり、従つて若し非科學的であれば如何に歡喜に充つるとも凡ての美に門戸を閉じ、且つ等しく確固として凡て下級の詩的表現の科學に閉づる人々の活動の舞臺が此處に存在する。

かゝる詩歌に讀まれた科學集は現時全く光彩陸離たるものである。而して嗚呼！天文学界に於ては他に於けるよりも特に然るのである。さりながら美と特徴との中に裝はれた科學知識の探求は其能力が未だ適當な職業を發見しない人々にと

つて價值ある仕事であらう。もし眼識を以つて選ばれるならば其の裏集は其勢に豊かに酬ひるであらう唯其作にして善くなされたこの感さな伴はゞ撰擇を餘り鷹揚にするの危険には二人共に働く共著の場合、即ち一人は特に科學的能力を有し他は純なる詩的趣味の人である場合に最もよく遭遇する。

天文學的詩歌の供給が驚く可き程貧弱なために人をしてかゝる莊嚴な科學の事實を詩句の満足と與へる裝飾の中に禁はせんとする者は詩歌に於て最高の靈感を有し、同時に最近の結論に躓き易くない天文學の智識を有してゐなければならぬに様に考へしめる傾向がある。かゝる詩句の目的は美を愛する心に科學を喜びをなすにある。之は其作を戒嚴の水平線上に保ちながら、何時でも適當な場合には翼を張つて提出された題目の莊重さと鈞合ふた尊嚴に迄翱翔すべき詩句で短刀直入的に知識を表現する能力を必要とする。

かゝる作品は形式的な機械的な方法では爲し得ない。それは仕事であつてはならぬ、寧ろ詩人の心靈に於ける焰の如き熱心でなければならぬ。其仕事は自發的愛性の方面に於て全圓となつて發生し遂に輻射數に至つて抒情的雅致ある一節が

自然と法則の榮光を發現せなければならぬ。吾等の地球はエーテルの海中を航してアーデンの森林や、アバロンの島よりも更に美はしい目的地向ふ廣大な船では無からうか。

かゝる我等が『真理』と名づける夢は詩人には實在性を以つて來るものである。それは彼にまつては宇宙的弦の音樂である。曉星の歌は未だ下稽古の最中である。天文學者詩人はその下稽古を最も美しい形に於て開く、他の者は其最高の評價の限界迄考へ及ばない。彼等の感情の貧弱は彼等の心的遲緩より來る或る場合には彼等は常に狹量と無能との表徴となる性能即ち獨斷的な科學的智識はあつても美術に興味の無い人々の通常使用する話の言葉は如何に貧弱で低級である事よ、若し我等が美の一句を偶々使ふとすれば、され程我等の語彙は豊富なるであらうか。

古の父祖の時代の

かの延べられし食指の上に

尙五語長く飾りなば

そは永遠に閃めき光らん

天文學者は時々人々が其信念であるミ考へた事の攪亂者獨斷家の側に於ける棘であつた。ダーウインが其植物學的論文を以つて、又ライエルが地質學的改革を以つてした挑戰も、コペルニクズ、ガリレオ及び其他の天文學者が全宗教的組織を顛覆せしめるが如き革命的思想を以つて人々の信條に對つて大膽に根本的に挑戰したのには及ばない、進化論は過去の信仰よりも無限に大きな信仰を要求しながら避け難い神學的混亂を作ふた自然的方法の換言を挑んだ。詩人は殆ど常に科學を相携へて思想の邊疆に前進するの準備を有してゐる。天文學者詩人は正當な自然觀を懷いてをる。自然こそ彼處で信仰は事實に一致し、知識を敬虔と謙遜を生むの所なれ。

純粹な科學の智的理解も若し其科學者殊に其天文學者が幻を解する詩人の眼識を以つて又現象の裏面に存する實在の或意思を以つて真理の太空をのぞき込まなければ、自然ミ人生の充分な哲學の基礎ミはなり得ないのである。彼は個別の事實の意義を認識するかの千里眼の力を持たなければ彼自らの生命星を宇宙の生命星ミの間の眞の關係に於て見る事は不可能であらう。日光が我等の眼から無限の夜を隠す様に智識の

光も顯微鏡的事柄に忙殺されて、より小さい眞理ミ智識の太陽光の爲めに盲目にされ且つ其の爲めに大いなる幻の明瞭な啓示を得損ふものである。詩人はより長い焦點距離の眼を有してゐる。そして出來れば天文學者の裏にあつて望遠鏡をのぞくべきである。詩的眼識の無い天文學者は死の彼方を見る事が出來ない。従つて彼れ自身の意識の永久性について不安の感を懷くのである。

眞正の詩人は隱影の價值を實感する。そしてその靈感に由る遙か廣大な幻の優越性から人生ミ自然により廣大な意識を把握する。彼はそれ等が他の範圍中に擴がつて居り日中に器械で計量し得るよりも遙か早い速力で動いてゐる事を見出す意識の水平線を低めよ、然らば萬事は誤謬の如く見える。水平線を高めよ、萬事は幻想の如く見えるものである。然し詩人は幻のより高い水平線に昇る能力を持つてゐる。彼處では普通の知覺の所有者にミつては馬鹿らしく見るに是等のものも彼れにミつては啓示する夜の諸星の様に眞實なものである。彼が見る所を述べるミ非詩歌的人人には獨斷的に見わる。然し物理的現象の觀測者が知るミ等しく詩人は彼れが見る所を

確實に知るのである。彼は一つの異なる世界……彼自身の世界……を觀測しつゝある。然らばさうして彼の幻を見ない門外漢が彼は誤つて居ると明言し得ようか。否定は肯定よりも偉大ではない。多大な事柄を見る所の人は常に少數者中にある。盲人に何物も見るべきもの無しと明言せしめよ。

此論文に於て私は思索と敬虔とが高貴な價值と意義とを有する天文學的補助者である事を示めさうと努力した。其の理は彼等が歡喜と驚異の外衣を以つて思想を装ふからである。

彼等は科學の爲めに、恰も文體が文學の爲めにする様にそれを非常に巧妙に人格の感化を以つて裝飾して全く人格無き、壯嚴なものゝ様に見えしめるものである。然しながら此美しい結果には俄かの決心では到達し得ない。『いざ、余は天文學者にならう。余は眞正の詩を作らう』と云ふ人は彼が其仕事に生命を献け、富を傾け、而して靈魂の能力を其仕事に傾注しなければ、何れをも成就し得ないであらう。之れ並に凡て他の活動の世界に於けるあらゆる美麗な成果は決斷的献身と忍耐深き著意とを要求するものである。

然し銘々己が畑でせなければならぬ天文學者の爲めの最高

の成果を得るには其科學の完全な智識を必要とする。詩人の至高の成功は彼の幻、趣味及び人智以上の事柄の實認から生ずる天文學者も詩人も共に是等學問と文學との標準を無視する事は出来ない。それなくして兩者は必ず道樂や卑俗や無用に墮落するであらう。唯かゝる献身のみテニスの挑戦に應じ得るものである。……………

永遠の天上界を再び裸にする爲めに

靜けき畏れの中に再び感ぜん爲めに

纏ひかぶさりし暗黒を破裂せしめよ、

靈魂の周圍なる星の世界を

凡て彼女の運動を法則もて一つならしめつゝ

強大なる想像は廻轉するなり。

天文學的探求の無邊際なる原野が調和と適當とを有する爲めに生れた驚異と歡喜の感は心靈を助けて我等の視界に常に現はれ来る生活と活動の様式の中に發見をさせ又示題せしめて我等を謙遜と光明の下に思索の遙か廣闊な世界や思想の遙か廣大な原野に導き至らしめるものである。それは確かに彼

の天空の新しい歌を吾等の爲めに常に詠じ出でやうとした熟練な美術家の現前に存在した壯嚴な王國なのである。

光明輝く道邊に燃わて

己が火の軌道に沿ひつゝ廻る

赫々たる千百の星座は……

『大神の爲めに道を備へよ！』と歌ふ。

一九一〇年の七、八月號王立天文學協會新聞に於て T・A バターソン氏の筆になる『美術と天文學』と題した有力な論文が出版せられた、趣味ある論文が多數最近此の協會に提出されたが、それらは天文學と他の美術及科學の間に有する關係を示めすものである。凡ての科學と美術、凡ての宗教と倫理とは一つの宇宙の根源から生じたものであるから、我等が我等の凡ての研究に於て彼等の一致の證據を發見する事は之れ程自然な事はない。

今や世界より武備を解除し、海陸ともに戰爭を廢止せんとする國際的努力に鑑みて、凡ての美術と科學、宗教と商業、

政治と工業に於ては我等の國際的社會的關係に於けると等しく相依の大法則を遵守すべきである。是等人類の各種族を結合するに役立つ運動が強烈になされる必要があると同時に凡ての偏見を根絶されなければならぬ。凡ての區分的政策、凡ての有害な行動、狹隘な愛國ですら特にそれが我自國のものであらば疑惑を以つて嚴密に検査されねばならぬ。何んとなれば凡ての人間も凡ての國民も一源泉から出で來つたからである。

會商と協議の時代は來つた。文明の爲めに生じた不潔な無秩序を潔めるに於て一方には更に大なる正義の要求を認めながら我等が凡ての自己辯正を拋棄する事を誠心もて望まざるを得ない各人の心中に好意が存在するに至る迄は地上に何等平和は來り得ない事を我等は知悉してゐる。我等の心情に凡てに對する深切の念が存在する迄は我等は天文學者や詩人の立場をとつて、我等自身の仕方や、慣習を嚴査しつゝ、『之れは宇宙間に於て果して如何に見ゆるだらう？』と自問する事は出來ない。

己が故國を愛する者は智慮あり
より光榮なるは其幻を見る眼識もて

青きかがめる天空の下の

凡ての顔貌に我等の神を認むる者ぞ、

一つの神ぞ我等のものなれ、一地一氣、

一海、一空は普く存する。

世界はさまで廣大ならず、

且、天は唯一の輝く階段を有するのみ。

註略

「かくて我等は星々に達するなり」は又「是れぞ不窮の名聲に達するの途なる」とも譯し得る。シツク、イツール、アド、アストラの意

「メーガス」は古波斯の僧侶階級のもの、賢人、博士と譯するも可故にバルセーザル博士とも譯し得。

「アーテンの森」セークスピアによりて紹介されし林地、英國ウーウイツク州一小地。

「アバロンの島」中世記のローマンセ中には地的樂園の此方より遠

からざる大洋の一の島にして其の上に磁石の城ありと云ふ。アバロンはアーサー、オベロン及びモルガン・フェーの住所として表はれ、古佛蘭西のローマンス「Ogier le Danois」中に最も詳記されてゐる。ケルト人の神話中には幸福な者の住む島、靈魂の住む島、林檎の島とされてゐる。其の位置は種々の説があるが、英國の格拉斯トンベリーが最も真に近いらしい。

暗黒星雲に就て

E N ラ ツ セ ル

現今一般に信じらるゝ所によるに、銀河中の多くの暗黒點や、空の星のない暗黒な部分は、遠距離にある星と吾々との間を巨大な暗い星雲狀物質が遮斷することに依つて生ずるものである。かゝる暗黒點が星學上重要なこと、並に、其蓋然的性質について、最も熱心に研究したバアナアドは、暗黒點に關する長い表を作つた。ブレイヤデス、オリオン座、蛇遺座の如き二三の場合に於ては、之等「暗黒部分」は空間に於て疑ひもなく或る星の附近に居ることを示す様な狀態で、其星の附近のほんやり光つて居る星雲狀物質の中に入つて居る